

## 農機研究37年の歩み(その5)

誌名	農業技術
ISSN	03888479
著者	鈴木, 豪夫
巻/号	27巻5号
掲載ページ	p. 225-227
発行年月	1972年5月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 農機研究 37 年の歩み (その5)

鏑木 豪夫

### 16. 研究企画官 (調整官) を兼務

昭和35年の初夏、故坂本研究企画管理官が退官されたのちに、わたくしにどうかというお声がかかった。さっそく同僚に相談してみると、「お声がかかったときに断わるのはよくない。研究部へ出る」という。しかしわたくしは出るのはいいとしても、本務で受けるべきか兼務で受けるべきかに迷っていたのである。実のところ、東京教育大学を兼務して両立させることができず、ご迷惑をかけた経験から、受けるならば本務かなと内心で決めていた。考えあぐんだすえ、盛永先生にご相談しようと思ひ立ち、西ヶ原を訪ねたところ、先生は「あなたは将来とも試験場に残留人でしょうね」といわれた。そこで、割り切れないものを残しながらも、兼務で出る決心がついたのである。

同年7月1日、研究企画官併任の辞令を貰った。始めは試験場と研究部と半々くらいの出勤と決めていたが、次第に研究部への出勤率が高くなった。しかし農機具部の仕事は軌道に乗っていたし、手塚君が部長代理として取りまとめてくれたので安心していった。当時の研究部には、研究部長の錦織英夫氏 (現日大教授)、研究管理課長の三浦道雄氏 (現中央畜産会常務理事) などを中心に、蔬菜の清水茂氏 (現全購連技術参与)、果樹の森英男氏 (現全購連技術参与)、畜産の加唐勝三氏、経営の森秀男氏などソウソウたる論客が揃っていて、会議ともなるとなかなか賑やかであった。わたくしのアシスタントとしては、三枝浩三君 (現マレーシア訓練センター勤務) と石原隆一君 (現保育園自営) がおり、研究部それ自体の仕事のほか、全省にわたり農業機械に関する技術相談役の仕事もかなり多かった。

35年11月に、国際米穀委員会 (I.R.C.) の総合および農業機械作業部会が、ベトナム国サイゴン市で開催されることになり、わたくしは日本代表 (総会の方は代表代理) として派遣されることになった。わたくしは天辰克己代表 (現日本植物調整剤協会理事・研究所長) とともに、外務事務官に併任され、I.R.C. 憲章改正案の勉強のため、数日間外務省に通ったものである。作業部会は11月10日から15日までの6日間にわたり開催されたが、農業機械の技術的事項が多いので、比較的理解しやすく、わたくしもいつのまにかつられて、しばしば発

言していた。

11日早朝、突然わたくしの泊っていたホテルの近所で銃声が起こった。機銃や迫撃砲の音も聞える。大使館に連絡するとクーデターが起こったのだという。ホテルにいるよりは国連旗の立っている会場の方が安全だろうという気持ちも働いたので、会場に行くことにした。その日は欠席国もあり、会議も午前中だけで中断の形となり、ホテルに引揚げた。つまりこのときは、ゴージンジェム大統領の家族専制政治に不満を抱いていた降下部隊司令官グエン大佐が反乱を起こし、一時は革命成功を思わせたが、翌日は大統領の軍門に降り、グエン大佐はプノンペンに逃げたが逮捕されて幕となった。この間、FAO事務局勤務の大戸元長氏 (現海外農業開発財団専務理事) が、ひとり銃声の間をぬってホテルからホテルへ代表団の連絡に走り廻っていた。「やっぱり大戸さんも日本人だな」と思った次第である。これに引きかえというとわるいが、韓国代表の張永哲君 (東大の同期生) は、サイゴン河に碇泊している三井汽船の貨物船を指さしながら「おまえ、おれ達と一緒にあの船に乗って帰国する交渉をしろ」などといって、わたくしを困らせた。

作業部会は、1日半の遅れをとり戻すため、13日の日曜日にも続行され、最終日には深更にまでおよんだ。会議の内容は、まず各国代表から、稲の生産、加工、貯蔵に使用される農機具につき報告、それについて意見が交換された。日本の報告で注目されたのは、田植機、刈取機、乾燥機、低温貯蔵、穀粒電気水分検定器などであった。15日には天辰さんも到着して、翌日からの総会では天辰さんが主役だから、わたくしはのんびりと過ごした。今期中には、ベトナム政府に寄贈する日本農機具の展示会も開催され、日本からも数社のメーカー諸氏が来国していた。わたくしも各国代表への説明役となったのである。I.R.C. 憲章改正案も賛成多数で可決され、わたくしは、鳴り物入りの会議を終えて、天辰さんとともに無事帰国した。

### 17. 農機研の設立準備

戦後における農業機械化には、3つの発展段階があるといわれている。第一の段階は、農村インフレと供出制度を契機として脱穀調整機などの普及した終戦直後から27年まで、第二段階は、農地改革によって自営意識の高

められた農民が、個別の経営合理化を狙って小形トラクタと小形防除機を導入しはじめた28年から35年の期間、第三段階は、農村の近代化、農業構造の改善にかかわる国の諸事業、府県、農協等の機械化センターなどに刺激されて、大中形トラクタ、スピードスプレヤーの導入がはじまる36年以降である。この発展に応じて、農業機械および農業機械化の試験研究も逐次充実されてきたことは、既述のとおりであるが、さらにわが国の実情に適合した機械とその利用法に関する研究成果を期待する声急速に高まってきたのである。とくに農業機械の開発改良に関する研究は、農事試験場の枠内においては、人員、施設の確保、研究項目の選定等に限界があり、畜産、園芸など成長部門を含めた試験研究の急速な発展は、望みえないような情勢となっていたのである。

このような背景のもとに、昭和36年度にはいると、研究部の業務分担として、わたくしには農業機械化研究所、農業研究所、植物ウイルス研究所の設立準備という仕事が割当てられた。このうち、農業研究所は関係業界の不振に基づく出資難のため、植物ウイルス研究所は、さしあたり植物ウイルス病に関する共同研究を推進して、さらにその体制を強化して基礎研究の徹底的な展開をはかることとしたため、結局最後には、農業機械化研究所の設立だけにしぼられた形となったのである。わたくしは、当時の振興局長の齋藤誠氏（現農業信用保険協会理事長）および総務課長の大和田啓気氏（現農政調査委員会理事・事務局長）、農林水産技術会議事務局長の増田盛氏（現参議院議員）などの指示を受けながら、研究所設立の活動を開始した。

まず、もっとも関係の深い農機業界の意向を打診してみようということで、わたくしは、当時の総務課事務官の新井昭一君（現水産庁漁政企画課長）とともに、日本農業機械工業会長の故井関邦三郎氏を訪ねた。ひととおり趣旨を説明すると、井関さんは「それはいいことだ、まず2億円くらいで、立派な施設を作って、だんだん大きくするんですね」と、まことに色のいい返事が戻ってきた。「これはいけるぞ」と二人は大いに喜んで、新井君のごときは痛飲のうえ、座敷に大の字になって寝てしまったことを記憶している。井関さんの太っ腹にも大いに感激したが、陸用内燃機械協会専務理事の故森田卓爾氏の協力的態度にも感謝しなければならない。10年の歳月を経た今日、お二人とも故人になられたことは、返すがえすも残念である。

いざ、研究所設立と決定されると、そのあとが大変な作業となった。設立趣意書を作成して、財界、農業団体、関係業界に出資寄付の呼びかけをすること、研究所

の予算案を編成すること、農業機械化促進法の一部改正案を作成すること、研究所の用地を物色することなどが主な作業であるが、これに付随して細かい仕事が続々と派生してきた。そこで、振興局総務課には、橘武夫参事官（現国立国会図書館専門調査員）を長とする準備室が設けられ、これらの諸問題を処理していくこととなった。準備室に詰めかけた面々は、わたくしのほか、前記の新井事務官、前田耕一技官をはじめ、瓜生瑛事務官（現農林省畜政課長補佐）、渡辺昇技官（現農林省肥料機械課長補佐）、富沢朋春事務官（現農機研総務部経理課長）などで、後になって当時の総務課長補佐の菅原源寿事務官（前農機研総務部長）も加わった。改正法律案が国会に提出されたころには、わたくしも齋藤振興局長のお伴をして、何回か衆議院農林水産委員会にも出席した。当時の委員長は野原正勝先生で、先生は亡父徳二の愛弟子でもあったので、なにかとわたくしをかばってくださったことは忘れられない。

研究所設立予算は、大臣折衝にもちこまれ、12月30日、当時の農林大臣故河野一郎氏がかついで、政府出資2億円と内定され年を越した。また改正法律案も、翌37年4月に国会を通過して、いよいよ研究所設立のメドがついたのである。これより先、3月に、わたくしは研究調整官併任を解かれ、手塚右門君と交代した。手塚君に研究調整官への出馬を懇請したときのわたくしの心境は、いま考えてみてもまことにつらいものであった。というのは、いまここで研究調整官に出るということは、手塚君に研究所には来ないと決心してもらうことと等しかったからである。この懇請を取って受けてくれた手塚君には幾重にも感謝しなければならない。

農機具部長専任となったわたくしは、新設の研究所へいく人と鴻巣に残る人との仕分けという難事業に着手した。これは人事としてまことにむずかしいものであった。しかし、職員はわたくしと菅原君の説得を聞いて、よく協力してくれたのである。一方、農事試には、農機具部を解消したあとに作業技術部を作るという構想があり、その根幹となる考え方について、わたくしは泉清一君、向井三雄君（現農事試作業技術部機械化経営研究室長）等の協力を得て「農業機械化研究の範囲と研究方法」という冊子を作成して、作業技術研究の重要性を力説したのである。この間を通じて、終始公正な態度でご指導くださった農事試験場長瀬古秀生氏（現農林漁業金融公庫顧問）に深甚な敬意を表さなければならない。

## 18. 農機研の建設

研究所設立の準備も順調に進んでいたころ、齋藤局長

と大和田総務課長から、「あなたは研究所にいてくれるでしょうね」という話が出た。実のところ、当時のわたくしは「もう少し農林省に残って仕事をしてみたい」という気持ちがあった。しかし考えてみると、わたくしもそのとき51歳になっていたのだから、あまりご迷惑になってもと思ひ返し、研究所へ入る決心をした。

37年10月1日、研究所が創立されて、初代理事長には小倉武一氏（現アジア経済研究所会長）、監事には小林孝平氏（現長岡市長）、理事には立川宗保氏（現日本蚕糸事業団理事長）とわたくしが任命された。鴻巣の農事試験場大会議室で、研究所の開所式が行なわれたとき、わたくしはホッとしたのである。それは、官界、財界、関係業界などのご協力により創立までこぎつけたという安堵感もさりながら、これからの農業機械およびこれを取りまく問題を処理するに当たり、わたくしひとりではなく、理事長始め有能な役員を得たという気軽さであった。うのぼれたいい方かもしれないが、これまでは、こと農業機械に関することは、程度の差こそあれ、すべてわたくしが関与しなければならぬというように、思い過ごしてきたからである。研究所の設立により、永い間にわたる孤独から解放されたわたくしは、真実ホッとしたのである。

しかし、それも束の間のこと、さっそくその日から創設の事務が山積していた。その主なものは、予算・会計の確立、諸規程の制定認可、用地問題、基金募集等の事務であった。そのころの模様を立川さんは次のように年報に書き残している。「店びらき早々事務所に乗りこんでみたが、まず机椅子を購入して執務できるようにせねばならぬ。机は入ったが電話がまだつかない。さっそく電話局へ走らねばならぬ。用紙がない。封筒がない。ノリがない。ハサミがない。お客が来ても茶碗がない。アレもいる、コレもいると、品物をととのえるだけでも一仕事である。」

まず、用地問題であるが、発足のときには研究所は農林省大宮種畜牧場の地に建設することが予定されていたが、その細目は未定であった。したがって、開設当初、研究所本所は鴻巣に間借り住い、東京事務所は勸銀本店（11月から有楽町の農林中金ビル）という有様であった。これに関し、農林省においても具体的に検討が加えられ、大宮種畜牧場は白河に移転、その跡地を研究所が現物出資として受けることに方向が決まった。その後、大宮牧場の一角に職員宿舎、実験室などが建設されるに及び、一時は、東京、大宮、鴻巣と3個所に分散された時代もあったが、ようやく40年6月に一同大宮に集結した。建設は、まず仕事場である実験室を優先したので、

本館が落成して陣営が整ったのは43年4月のことである。

すでに設立準備のころから、研究所の基金は、政府出資5億円のほか、民間出資5億円（農業機械および内燃機関業界2億5千万円、一般経済界1億5千万円、農業団体1億円）と予定されていた。関連業界の方は、すでに約束済みであったが、一般経済界と農業団体は、研究所発足後に約束をとりつけることになったが、直接農業機械と関係のない方面では、話がなかなか進展しないこともあった。しかし農林省の支援と経田連の斡旋により逐次好転して、ほぼ満額に達する見通しとなったのである。この間において、当時の立川理事は「技術者には金の心配をかけない」と口ぐせのようにいわれ、資金集めに東奔西走されていたのには、全く頭の下がる思いがしたことである。資金の運用についても、わたくしはズブの素人であるので、すっかり立川さんをお願いしていた。その間の御苦勞は並大抵のものではなかったのである。

40年10月、小倉理事長は3年の任期を終えて、アジア経済研究所長に転任され、そのあとに立川さんが理事長に任命されるとともに、総務担当理事として柳田友輔氏（現住友商事KK顧問）を迎え、新しい陣容が整った。ちょうどそのころ、研究所は実験室その他付帯施設を始め、引続き本館を建てるという、いわば建築の最盛期で、建物に造詣の深い柳田さんは、縦横無尽の活躍振りであった。41年9月、小林さんが長岡市長選出馬のため辞任され、その後任として秋本正氏が監事に任命された。小林さんには在任中、広い視野からご指導をいただいたが、あるとき、役員健康管理係を勤めるといい出し、われわれにゴルフをやるよう勧められた。小林さんのお世話でわたくしもゴルフセットを購入した。しかし、いまだに1回も使用しないでいるが、そのご好意に対し申しわけないと思っている。

（前農業機械化研究所理事長）

宇都宮大学助教授 農博 森谷 憲著

## スライドガイドブック

写真図版64 A5判108頁 総アート 価550円 千110円  
 ▽掛図とスライドの違い ▽悪いスライド ▽よいスライドとは ▽原図の作りかた ▽機材—カメラとフィルム ▽ネガ（陰画）スライドの作りかた ▽ポジ（陽画）スライドの作りかた ▽カラーズスライドについての注意 ▽特殊なスライドの作りかた ▽スーパーインポーズ法 ▽スライド枠について ▽スライドの映写 ▽話すスライド〈本文に出てくる機材の種類・価格・発売元の紹介〉